

## 関根清三教授のコメントへのレスポンス

尹 哲 昊

ナグネ・訳

尊敬する関根清三教授の洞察力に富んだコメントに感謝申し上げる。関根教授は哲学、聖書学、倫理学という三つの観点からコメントしてくださいました。コメントの主たる要点は、以下のようなものである。哲学者たちは贖罪の神を信じていない。聖書の中心思想は贖罪思想ではなく、アガペーの愛である。イエスが宣教された神の国は、アガペーの愛を實踐することを通して具現される。関根博士は、贖罪思想はイエスに由来するのではなく、パウロに由来するものであると言われた。この問題について集中することが、関根教授のコメント全般に対する応答になるものと考ええる。

キリスト教の贖罪思想の起源は、旧約聖書とユダヤ教にある。旧約聖書においては、少数あるいは一人の義人によって多くの人が救われるという思想が諸処に見られる（創世記一八・六一三〇、イザヤ書五三・一一一二）。こうした思想に基づいて、後期ユダヤ主義においては義人の苦難思想や殉教者の神学といったものが発展した。すなわち、義人（殉教者）の苦難と死が多くの人を救うというものである。

こうした旧約聖書やユダヤ教の伝統上の脈絡において、イエスが自らの死を多くの人の救いのためのものと考えたとしても、それはおかしいことではない。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、

多くの実を結ぶ。」(ヨハネ福音書一二・二四)というイエスの言葉は、このような脈絡から理解できる。その上、このような意味から「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」(マルコ一〇・四五)という言葉も、イエスの精神をよく反映するものと言い得る。

しかし、イエスははじめから自分が死ぬしかないと考えて、神の国運動を始めたというわけではないであろう。万一、イエスがはじめから、自分が死んでこそ神の国の働きを完成できるものと考えていたのなら、ガリラヤにおける働きの期間は無意味なものとなるにちがいない。しかし、イエスは、公生涯における働きのある時点において、自らエルサレムへ行き、そこで死を迎えることとなるという運命を予感されたことは明らかである。こうした予感は、次のような彼の言葉によく表れている。「だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」(ルカ一三・三三)。同様に、弟子たちとの最後の晩餐においてイエスが語られた「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である」(一コリント一一・二五)という言葉も、自らの死の持つ救済論的意味についての、彼の認識をよく見せてくれるものである。

パウロの贖罪思想は、後期ユダヤ教の贖罪思想、すなわち義人の苦難の思想と殉教者の神学に基づく。イエスの死の救済論的意味、つまりイエスの死が「われわれのための」死であるという理解は、すでにパウロ以前の共同体において現れたものである。パウロはこの救済論的意味を信仰義認の教理としていつそう体系化し、全人類のための意味へと脱ユダヤ化、普遍化したのである。

イエスの中心思想はアガペーの愛であるという関根教授の言葉は正しいものである。しかし、アガペーと贖罪は二者択一という関係にあるものではない。イエスの公生涯は神のアガペーの愛を実践する生であった。イエスのアガペーは観念的で抽象的な愛ではなく、具体的な生の場において、神の正義を追求する愛だった。イエスは、自ら義しいと考えている宗教者や不義なる権力者を批判して彼らに抵抗し、貧しい人々や罪人たちの味方となつて彼らを擁護した。この

ようなイエスの行動（何よりも神殿肅清事件）が、彼の十字架での死の原因となった。

イエスの死は、アガペーの愛を実践した終局的結果だった。殉教者は死んでこそ殉教者となるのではなく、殉教者の生を生きてこそその死が殉教者の死となるのである。イエスの十字架における死は、彼のアガペーの愛の最終的帰結である。キリスト教信仰は、イエスの十字架において神の自己犠牲的な愛が現れたと信じる信仰と共に始まった。キリスト教の救贖についての教理は、まさにイエスの十字架に決定的に現れた神の自己犠牲的なアガペーの愛が、全ての人間の罪を対価なく赦し救うというものである。パウロの救贖教理の独特なる点は、神のアガペーの愛の表現としての、イエスの十字架において現れた神の救いの恵みを、人間は自らの行為の義によつてではなく、ただ信仰によつてのみ受け、これを楽しむことができる」と強調したところにある。